



TITLE:

大文字山を眺める度に思い出すだ
ろう幾つかのこと (吉田城先生追悼
特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

中村, 翠

CITATION:

中村, 翠. 大文字山を眺める度に思い出すだろう幾つかのこと (吉田城
先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 464-467

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138017>

RIGHT:

大文字山を眺める度に思い出すだろう幾つかのこと

中 村 翠 Midori NAKAMURA

吉田先生に向ける想いを、一般化したり抽象化したりすることは私には出来ない。わずかながら先生と関わることの出来た時を思い返し、ひとつひとつの具体的な場面を、それぞれに反芻することしか出来ない。思い浮かべる逸話はいくらでもある。

一番には、先生の並々なめ頭の回転の速さにびっくりした時のことである。私がまだ学部生で、恐れ多くて先生方とは研究についてあまり多くを話せていなかった頃。初めて吉田先生の研究室に卒業論文を見てもらいに行き、まだきちんと整理されてもない自分の考えを、拙い言葉で紡いだ。話しているそばから、自分自身にがっかりした、というのも、これでは誰にも理解してもらえないだろうというほど、私の説明はこんがらがっていたからだ。ところが、先生は、私が自信を無くして尻切れトンボに口を閉じるや否や、「ふんふん、つまり君の言いたいことはね…」と、私自身よりもよっぽど上手く、要約し始めた。驚いたのは、私の考えを全て理解して下さっただけではなく、錯綜した論理を解きほぐし、いともすっきりと、順序よく組み立て直していったことである。私は「そうそう、そうなんです」と頭を縦に振るばかりであった。

あるいは、講読の授業中、先輩の院生方が、担当の箇所を和訳する時。学部生の頃の私は、一文を訳すにも30分はかかるといったフランス語力の持ち主だったので、いくら予習をしてあっても、先輩方が訳を読み上げるのに、どうしても付いていけなかった。ブルーストのテキストであるから、尚更である。私が茫然としているうちに訳は終わり、先生がおもむろに口を開き、発音の注意・構文の注意・内容についてのコメントを次々に繰り出し始める。これだけのわずかな時間に、学生が提示したものを完璧に理解し、その上で問題点を指摘するというわけだ。またそれがいかにも分かりやすく説明されているので、私は、先生のコメントを通して、ベースとなっている先輩の訳がどういうものであったのか、遅ればせながら理解し始めるのであった。

先生は、こうした明晰な頭脳を持たれながら、学生の稚拙な考えを馬鹿にしたりしない方でもあった。昨年、まだ先生がご存命の頃であったが、過去に取ったノート類の整理をしていると、懐かしいものが出てきた。私が3回生の時に出席していた学部生向けの授業で、吉田先生は毎回のように、学生に紙を配って、授業の感想を書かせておられた。それを集めて、先生は全てに目を通し、

コメントをつけて返して下さっていた。その時の用紙が、そっくり出てきたのである。当時の私の感想ときたら、今読み返すと冷や汗が出るほど愚かなものだったのだが、先生は丁寧に読んで下さったようで、漢字の間違いまできちんと添削してあった。授業で扱った作品に対して、私が個人的感情を大いに交えたコメントを書いていれば、同じくプライベートの対話のような調子で、お返事して下さい。恥を忍んで明かすならば、それらのうちのひとつは、ボードレールの詩「A une passante」についてのやり取りであったのだが、私の主観に走った感想にも関わらず、先生はそれを真面目に受け止めて答えられた後、「このように関心を持つことは良いことです」と励みになる言葉を書いて下さっていた。ところで、現在、私はジュネーヴ大学に留学中であるが、偶然こちらの授業で、まさにこの詩に再会した。その瞬間、私は時と空間を飛び越えて、吉田先生が授業でこの詩を解説されている場面、次いで数年後、この授業の感想用紙をたまたま発見した場面に、舞い戻るのだった。

学部からの同級生と吉田先生について語るときには、繰り返し回帰する話題がある（というか、私がどうしてもそれを持ち出さずにはいられないのだが）。学部4回生に上がる前の春休み、数人の同級生と、共同研究室で読書会を行っていた。すると、吉田先生がひょっこり現われて、「おお、感心だねえ。このチョコレート、要らない？ 余っちゃってさあ。年度末調整だよ。真面目に勉強する人にはいいことがある」と言いながら、どうやらフランスから来たものであるらしきチョコレートを私たちに下さったのだ。今でも、その色と形を鮮明に思い浮かべることが出来る。ちなみに、次の読書会には、田口先生が現われて、チーズケーキを下さったので、「真面目に勉強する人にはいいことがある」というのは、真実だったということが証明された。

食べ物の話のついでだが、私が修士課程に上がってまもなくの頃、勉強するとも雑談をするともなく共同研究室に残っていると、いつものように夕方頃、吉田先生が顔を出された。その時も例のごとく、皆でお茶をしたのだろう、はっきりは覚えていないが、先生はいつもよりもやや早い時間に腰を上げられた。「さ、僕は夕飯を作りに帰らなくちゃ。」私はやや驚いて、「え、先生がご家族の夕飯を作られるのですか？」と尋ねた。まだ修士課程に上がりたてで、研究室の内情に不案内だったのである。先生が家事も研究もオールマイティにこなす兼業主夫であったというのは周知の事実だったということは、後に知った。さて先生は当然のごとく、「そうだよ僕は子供のお弁当も作るよ。今晚はパエリアだ、下ごしらえはしてきてあるけどね」と私に答えられた。二度びっくりした。下ごしらえ、ということは、私と違って、「パエリアの素」などという

レトルトものを使ったりしているわけではないのだ。どうやら、本格的な料理人らしい。途端に私の目が輝いたのに気づいたのか、先生は「時々うちで料理を作って学生やなんかを招待したりもするんだよ。近々またやろうと思ってね」と申し出てくださった。その時の私は、遠慮してみせるなど考え付きもせず、益々目を爛々とさせていたに違いない。

果たして、待ち望んだ食事会は、ほぼ一年後に実現された。それが最初で最後であった。しかしこの一度の機会に恵まれたことを、私は心から感謝している。夏の終わりのこの日のことは、一生繰り返し、温度や匂いや夕日の色と共に、甦って来るだろう。

実際のところ、奥様の典子先生との共同制作であるという手料理は、噂に違わぬ玄人裸足の美味しさと品数であった。ご自身の研究や、私のような学生の混沌とした説明に際して揮う、見事な手さばきと同じ正確さで、台所で料理をされている—そんな先生のお姿を想像させる品々だった。

手料理を満喫した後は、先生の息子さんと、お宅を崩壊せんばかりの勢いで遊んで、上のお嬢さんに迷惑をかけたりもした。ただ恐らく周りにとって幸いなことに、私はやや遠くに住んでいたのも、先輩の一人と一緒に、他の人よりも早めに暇を告げた。すると先生は、「京都駅に行くの？ だったら、最寄のバス停まで送ってあげる」と、私たちを案内してくれた。その時私は、研究室にいる時にもまして徹底した先生の気の配り様に、何だかハッと胸を衝かれて、どうにかしてこの感謝の気持ちを伝えたいと思い、お宅を出て夜道を一緒に歩きながら、息子さんは優しい人柄で、一緒に遊ぶのはとても楽しかったということ、またもやしどろもどろに訴えたのを覚えている。先生にまつわる記憶には、いつも何かしらこうしたもどかしさが付きまとう。私の嬉しさとか、感謝とか、尊敬の気持ちを、果たして先生に少しでも伝えることが出来ていたのであろうか、という疑問が残る。しかしそれもきっと、自己愛的な発想なのに違いは無い。相手に対する自分の気持ちを伝えたいという欲求は、相手のことを良く見ていない限り、容易にひとりよがりなものになり得るのだから。

私が修士論文を書いていた時期には、先生はお忙しい中、多くの時間を割いて、助けて下さった。その頃、私は自分でも気づかぬうちに随分痩せてしまったようで、会うなり先生から「中村さん痩せたね！ ちゃんと食べてる？ 顔色もあまり良くないよ」と心配されてしまった。でも実際のところ、心配されるべきは、吉田先生の方だったのである。私は知らなかったのだ、先生の病状が既に芳しくなかったということ。あまり表に出されなかったから。いやそうじゃない、私が気づかなかったのだ。あの時のことを思い出すと、いつも悔し

く思う、私は自分のことでいっぱい、周りの人をてんで見ていなかった。一方先生は、周りを気遣っておられた。

先生の訃報を聞いて後、心に決めたことがある。が、それは言わない。どこにも記さないで、自分の頭の中だけに刻み、忘れないようにしようと誓った。

(なかむら・みどり 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)